

使徒行伝での宗教的ユダヤ教(訳注)に対する弟子たちの態度

2010年11月21日 アシェル・イントレーター

訳注: Religious Judaism を今回あえて「宗教的ユダヤ教」としたのは、使徒たちもユダヤ教徒であり(彼らは厳密に言うとクリスチャンではない。)、古代においても現代においてもユダヤ教の中に様々な「温度差」があり、その中でも伝統や口伝律法を重んじるユダヤ教の宗派を表すために「宗教的ユダヤ教」としました。Judaism は「ユダヤ教」「ユダヤ主義」「ユダヤ性」と訳すことができますが、今回はユダヤ教の中でもとりわけ強い宗教色のある宗派に対して言及されているので、この訳語を当てました。

イスラエルにいるメシアニックジューの牧師たちの間で、宗教的ユダヤ教及びモーセの律法に対する私たちの態度に関し、議論が続いています。少数(おそらく10%ほど)は、ラビ的ユダヤ教のすべてを受け入れるべきだと信じる者がおり、別の少数(おそらく20%ほど)は、ラビ的ユダヤ教のすべてを拒否すべきと信じる者がおり、大半はこの討議の板挟みに合っています。

私は、世界中の教会の牧師たちの間でも似たような議論があることに気付いています。非常に少数は非常にラビ的ユダヤ教に魅了され、すべてのユダヤ文化を守りたいと望んでいます。より多数はまだ置換神学、信仰至上主義者(反律法)、そして、反ユダヤ主義にさえ影響されています。イスラエルや聖書のユダヤ人に対して愛を感じている多くのクリスチャン指導者たちもまたその間に板挟みに合っており、いくぶん混乱した中に留まっています。

この議論は、2,000年前の使徒15章の議論と比較することができます。そこで異邦人はモーセの律法を守る必要があるのか、そうでないのかという疑問が問われました。使徒たちの答えは、私が解釈するには、異邦人クリスチャンは律法のしるしとしての儀礼的な要素からは自由であります。普遍的な倫理的律法に関してはまだ彼らも守る義務があるのです。

注: この、祭司的なしるしと普遍的な倫理性という区別は、新約聖書で考案されたのではなく、それはすでにイスラエルの預言者によって述べられてきました。イエシュアはこの件についてマタイ 9:13、12:7、23:23、そしてマルコ 12:33 で教えられました。さらに、しるしとしての律法と倫理的な律法の区別は、旧約聖書の1サムエル 15:22、イザヤ 1:11 そして17、エレミヤ 4:4、ホセア 6:6、ミカ 6:7 そして8にも見ることができます。私のお気に入り箴言 21:3 「正義と公義を行なうことは、いけにえにまさって主に喜ばれる。」です。

背景となる情報を提供するために、私は使徒行伝の中から、ラビ的ユダヤ教またはモーセの律法に関する使徒たちの態度に関するすべての箇所を列記した簡単な調査をしました。この件に関し私は148箇所を見つけました。78箇所は批判が含まれ、70箇所は肯定が含まれていました。この問題に関して言及している箇所を含まない章は、ただ一つありませんでした。この問題は、初期の信仰共同体にとって重要であったように、現在も重要なのです。この調査から私たちは一体何を学ぶことができるのでしょうか。

第一に、この問題に対してバランスが必要です。ラビ的ユダヤ教を完全に否定的または完全に肯定的に見ることは聖書的ではありません。そこには賛否両論があります。私は、パウロの(サウロの)この件に関するまとめであるローマ 11:28「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、先祖たちのゆえに、愛されている者なのです。」を称賛します。ラビ的ユダヤ教のある要素は神の恵み、そして救いの福音に敵対していますが、しかしユダヤ教の中に、アブラハムやモーゼからの歴史的な信仰を維持している要素があるのです。

使徒行伝の中の 78 箇所は宗教的ユダヤ教に対して批判的ですが、大半はメシアニックジューに対する迫害 (59 箇所)、そしてイエシュアを否定すること (10 箇所)に関するものです。たった 9 箇所、彼らの律法主義または罪に対して批判しています。しかし、私たちの父祖の信仰の継承としての宗教的ユダヤ教の立場を否定する箇所は、一つもありませんでした。

これは両陣営に対して重要なことです。惑わされてはいけません。そこにはイエシュアに対する信仰に反するラビ的ユダヤ教に内在する「隠された意図」があるのです。識別を行わない人は、ラビ的な教えによって過度に影響を受け、弱められるでしょう。その一方で、福音に関しない件におけるユダヤ的信条や実践は、必ずしも使徒たちによって拒否されてはいないのです。

使徒行伝の中で「肯定」する箇所については、最大のカテゴリ(16 箇所)は、使徒たちがユダヤ人の信仰、文化そして民族的背景の一部として自身を同一化している言葉です。これらの表現は、福音を分かちあっている時にとりわけ述べられたもので、イエシュアへの信仰がイスラエルの民と分離することのないようにしているのです。

二つ目のカテゴリ(15 箇所)は、モーセの律法に対する使徒の態度です。彼らは律法そして預言者を神の権威ある御言葉であると見なしています。彼らは戒めを守ることや、古代イスラエルの預言に従うように自身を見なしています。

三つ目の肯定する領域(15 箇所)はラビ的な伝統です。使徒たちは伝統を神の御言葉と見なしましたが、彼らは、自身の家族や友人たちの文化に対して敬意を表するためにあらゆる努力をしました。別の 10 箇所は街々のシナゴークに入るための使徒たちの習慣に関するものです。シナゴークは祈りや共同体活動、そして聖書の学びを行う場所として適切な場所と見なされていました。

最後に私は、敬虔、信仰そして宗教的ユダヤ人自身の中における召命に関して述べられているのを 14 箇所見つけました。実際、彼らはまだメシアを知らなかったですが、ユダヤ教の中で持っている義の度合いを無効にするものではなかったのです。

私たちは神の御言葉全体、すなわちトラー、預言者、そして新約聖書など、その真理に全力を注いでいます。第二に、私たちは周りにいる人々に対して効果的に私たちの信仰を分かち合いたいと願っています。最近の、イスラエルのテレビ局や新聞からのインタビューで、メシアニック共同体にい

る我々がどうユダヤ教やモーセの律法という課題に対処するのかと尋ねられました。イスラエルのメディア自体大半が世俗であるにもかかわらずです。

イエシュアと弟子たちがユダヤ人に福音を伝える時、トーラーの問題に対処しなければなりませんでした。現代の私たちもそうです。第一世紀の時と同じように、エルサレムから世界各国へ福音が再び述べ伝えられる際、初期の使徒たちが述べたように、御国が優先されるというメッセージを込めたいと思います。

私たちのアプローチは、聖霊の働きによって革新的であり、福音を伝える大胆さを持ち、倫理的に忠実であるよう努力し、そしてユダヤ教の伝統にバランスを持って対処するのです。私たちは使徒たちの足跡を追うのです。どうか、イスラエルのメシアニック共同体の中や、諸国のキリストの体においてこの問題に関し一致があるよう、お祈り下さい。